

『改正三河後風土記』について（一）

―用字・用語を中心として―

宇都宮 睦 男

（要旨）

『改正三河後風土記』の用字・用語について、主として意味が現行と異なるものを検討すると、和語より漢語の方が圧倒的に多く、漢語の意味の変化の激しいことがわかる。又、意味が現行と異なる理由を考えると、歴史的に意味が変化した結果によるものが多いのは当然であるが、それとかわりなく、漢語に近い意味で用いられていたり、鎌倉時代以来の軍記物語に通じる用法の見られる点に、『改正本』の漢語の特色がある。

〔キー・ワード……用字・用語、和語・漢語、中国漢語、和製漢語、準和製漢語〕

はじめに

『改正三河後風土記』には、原撰本たる四十五巻本の外、その

改撰本たる五十巻本の『三河後風土記正説大全』と四十二巻本の『改正三河後風土記』（以下『改正本』と略称）とがある。改正本は徳川家の奥儒者成島司直によって天保四年（一八三二）に成ったものである。本書は原撰本の誤りを正し、根拠のない妄説を削除し、足らざるを補ったもので、まさに改正本なのである。本稿

は、改正本中にみられる用字・用語について、主として現代の用法と異なるものを取り上げ、検討を試みたものである。調査の観点は次のようである。

- 一、表記と意味が現行と異なるもの
- 二、意味が現行と異なるもの
- 三、宛字について
- 四、現行では使わない用語について
- 五、熟語訓について

- 六、表記が現行と異なるもの
- 七、読みと意味が現行と異なるもの
- 八、字体が現行と異なるもの
- 九、語順が現行と異なるもの
- 十、読みが現行と異なるもの
- 十一、難字・難語について
- 十二、文法上の問題

本稿では、まず一と二について述べることにする。なお、テキストは桑田忠親監修『改正三河後風土記』（昭52・2・15、秋田書店）であり、用例の下の一（一）内の数字は頁数、上中下は巻数である。

一、表記と意味が現行と異なるもの

まず、改正本における表記と意味が現行と異なるものを取り上げる。用例の配列は五十音順で、歴史的仮名遣いによることとし、見出し語の下の一（一）内に現行の漢字を記した。以下同じ。

〔らんばう（乱暴）〕

- ① 新羅^{しんら}の海賊、博多の津へ来り、豊前国の貢絹船^{こうけんせん}を濫妨^{らんぼう}す。
（上31）
- ② 夫より又土佐・安芸・周防等^{すおう}を濫妨^{らんぼう}して、直に大宰府へ趣^{たす}官物を奪ひ取よし注進あれば、（上34）
- ③ 諸国の軍勢乱妨^{らんぼう}して土民迷惑すべしとて制札を立られ、

（上317）

右のように、改正本では「濫妨」又は「乱妨」と表記し、意味も『邦訳日葡辞書』（以下『日葡』と略称）に「Ranbo, Mildare smataguru. 略奪すること、あるいは、強奪すること。例、Ranbo suru」とあるように、略奪又は強奪することである。諸橋轍次著『大漢和辞典』（以下『大漢和』）には、漢語の用例がなく、和製漢語とみられる。この語の初出例は、『日本国語大辞典』（以下『日国』）や『新潮国語辞典』（以下『新国』）によると、西宮文書寿永三年二月日、東鑑建久六年八月六日、太平記一〇、御湯殿上日記などである。『文明本節用集』（以下『文明本』）には「濫妨^{らんぼう}濫望^{らんぼう}乱妨^{らんぼう}（456）」、『書言字考節用集』（以下『書言字考』）には「亂妨^{らんぼう}（⑩364）」とある。なお、現行では見出し語のように「乱暴」と表記し、「あらあらしくふるまって、人にめいわくをかけたり、ひどいことをしたりすること。」（林四郎編著『例解新国語辞典』（以下『例解』）である。

二、意味が現行と異なるもの

次に、改正本に見られる意味が現行と異なるものを取り上げる。

〔あんない（案内）〕

- ① 寛兼て案内は見置たり。広忠君より賜たる脇差を腰にし、忠倫が寝所へ忍び入、（上181）
- ② かくて定盈は此三人を案内として先登し、井伊谷の城をば、忽に乗取しかば、（上331）

③ 越前勢も、浅井には一言の案内にも及ばず、三千余騎みな越前へ逃失たり。(上374)

右の用例の②は現行と同じく「道案内」という意味であり、又、③も「通知。知らせ。」という意味で現在も用いられるものである。しかし、①は「内部の事情・様子。実情。」という意味で、現行にはないものである。日葡には「Amari 前もつて知らせる」と、あるいは、最初につづけること。Amari uo vca goo. 戦争の時などに、戦場などを調べたり、偵察したりする。Amario xiru. 道を知る、入口や出口を知る。」とある。初出例は、日国には、①の場合が宇津保、源氏、御堂関白記など古い用例があり、③の場合は狭衣物語の例が古い。なお②の用例も、新国には、枕草子、平家の例をあげ、古くから見られることになる。なお、「案内者」ということばにも、

④ 近日三左衛門忠倫等を、当国案内者として、岡崎を乗取んと、大軍を催促するよし也。(上180)

⑤ 寄手は自国の案内者、味方は他国不知案内、ともに籠城かなふべからず、(上223)

のように、右の④の「案内者」は現行と同じ意味であるが、⑤は「事情をよく知る者」という意味で、現行の用法と合わない。文明本に「案内(6292)」、書言字考に「案内(418)」「不知案内(194)」とある。

「うわうさわう(右往左往)」

① 左馬助真先かけて右往左往馳めぐり、力を尽し花々しくぞ戦ける。(中213)

② 狼狽して戦はんともせず、右往左往に散乱す。(中390)

右の用例中、②の「右往左往」は「どうしたらよいかわからないで、うろたえること。」(例解)の意味で、現行と一致しているが、①は文字通り「或は右にゆき、或は左にゆく。」(大漢和)という意味であつて、「うろたえる」という意味はない。日葡には「Vuo sa uo. i. vuo zano. 右へ行ったり、ひだりへ行ったりして。例、Vuo sa uo mi tori yugu. 何か大騒ぎして、大勢の者があちらこちらへ取りすぎる。」とある。大漢和には「或は右にゆき、或は左にゆく。多くの者が入り乱れて動いてゐるさまにいふ。又、四方八方に散乱するさまにいふ。混乱の状態。」とあつて、漢籍の用例がない。日国・新国は右の用例②の意味として、平衣物語の用例をあげる。文明本に「右往左往(4872)」、書言字考に「右往左往(407)」とある。

「えうち(幼稚)」

① 今度の一乱幼稚の秀頼公結構有べきにあらず。(下418)

右の「幼稚」は文字通り「幼い。いとけない。幼少。」(大漢和)という意味であつて、現行の「ものごとの考えかたややりかたが、年齢にふさわしい水準に達していなくて、たよりない感じである。」(例解)とは意味が相違している。日葡には「Yo cchi. 幼い男の子や女の子。」とある。

大漢和・日国・新国の古用例は全て右の用例①と同じ意味で、続日本紀、今昔物語などが古い用例である。文明本「幼稚(315)」、書言字考「幼稚(4297)」とある。大漢和に漢書、白虎通、列女傳の例があるので中国漢語である。

〔えんぜつ（演説）〕

- ① 武衛・家衛が一命助からん事、ひとへに季方の演説頼み申ぞ（上78）

- ② 翌十二日の小田原へ参り、其旨演説するに、北条父子は是天の賜と大に悦び（中218）

- ③ 其外九州平均の旨、委細に徳川殿に演説すべし（中342）

この語については、別稿「三河後風土記正説大全について（二）」（愛知教育大学研究報告書第47輯・一九九八・三。以下「正説大全」と略称）で述べた。なお、文明本に「演説（7074）」、書言字考に「演説（12331）」とある。大漢和の書経・周書・白居易など漢籍の用法と一致している。中国漢語である。

〔かいほう（介抱）〕

- ① 御外祖母玉桂慈泉尼公も尾州より来り給ひて、ひそかに今川家の権臣等になげ給ひ、御幼稚の間介抱ましましてける。

（上200）

- ② 鎮吉を貴国の近辺に差置候へば、万事御介抱を頼み参らず（中222）

右の「介抱」は「面倒をみる。世話をする。」という程の意味であつて、今日の「病人やけが人などのせわや、てあてをすること。」（例解）とは少し異なる。これは和製漢語であつて、日国・新国には「助けて世話をする」という意味の用例として上杉家文書、冥途飛脚をあげる。大漢和には「世話する。看病する。又、其のこと。〔傾城冥途飛脚〕」とあつて、漢籍の用例がない。

〔かくげん（格言）〕

- ① 畠山義春入道、福島・加藤に向ひ、各人質は豊臣家に出置しを三成奪取し上は、関東の御手を引こそ道なれと申ければ、諸將其理に後々までも入道が格言と人々感ず（下210）

「格言」は、日国に「簡潔に人生の真理や機微を述べ、処世の訓戒となるような言葉。多くは昔の聖人、偉人、学者などが言い残したもの。金言。」とあるのからすると、右の用例①は、当代人のことばについて述べていて、少し用法がずれているように思われる。なお、用例中の「関東の御手を引く」というのは、関東と関係を断ち切るという意味ではなく、関東と手を結ぶことであろう。大漢和に論語、魏子、潘岳・閑居賦、抱朴子に例があつて、中国漢語である。

〔かくご（覚悟）〕

- ① かく囚人となつて、夫にて恥とせずと仰らるるは、いかなる御覚悟かと疑しく候（下381）

- ② 此人々の覚悟にて、東国勢に敵せん事思ひもよらず。（下433）

日葡に「Cacugo. 用意、準備。Cacugono maye de gozaru. 物事をするための用意ができています。また、心積もりをしています。」とあるように、「心積もり」の意味である。新国・日国には「心構え」とあるのが当る。ところが、大漢和によると、漢籍（荀子・韓非子・史記・漢書）に見られる意味は「さとる。以前の過誤をさとる。知る。」である。従つて、「心構えすること。心の用意。」の意味は漢籍に見られないので、準和製漢語ということになる。

この意味の用例は、宣胤卿記、武家義理物語、去来抄などに見られる。文明本「覚悟所」(2778)、書言字考「覺悟」(9687)とある。

「がまん(我慢)」

① 上宮寺の僧徒は我慢の旗幟差上て、邪見の策を提て、無罪の女童部を打擲す。(上251)

② かかる邪見我慢を偏執する徒は、日本国中王土に住居せしむべからず(下136)

右の「我慢」は「我意をはる」という意味で、現行の「しんぼうする」というのは異なる。日葡に「Gaman. Vare manzuru. 自負、高慢。Gamano cocorono vocosu. 強く自負する、あるいは、慢心し高ぶる。」とあり、大漢和・日国・新国などは、右の①②のような意味を仏教語のそれとみている。用例には、唯識經、法華經、今昔物語、太平記一八などがある。仏教漢語である。

「かんべん(勘弁)」

① この計は奇妙なりといへども、尤大事也。仕損する時は其跡至て仕悪し。篤と勘弁して明日是より返答すべし

(中261)

② 「其方敵の惣人数何程と積りたるぞ」と御錠あり。主水承り「某勘弁には二三万と存候」と申上る。(下327)

右の「勘弁」は「考え。思案。」という程の意味であつて、現行の「相手の罪や過失、無礼などをゆるすこと。」(例解)とは異なっている。日葡には「Canben. Cangaye vagimayuru. 考慮。」とある。日国・新国には、この意味では延喜式、甲陽軍鑑などの例を

あげる。文明本「勘辯」(2743)、書言字考に「勘辯」(9663)とある。中国漢語である。

「きば(規模)」

① 御こと一人の力を以て、將軍の多勢を相手とし、一日たりとも追退る事、御こと老人が名誉にあらず先祖までの規模ぞかし。(上66)

② 此時の功臣等に御判物を賜はりて、其家の規模とせらる。(上163)

③ 当時諸国英雄豪傑数多あるを置て、信長に仰付らるる事、武門の規模何事か是にしかん。(上300)

右の「規模」は「名誉。面目。」というほどの意味で、現行の「建物や計画、組織などの大きさ。」(例解)とは異なる。日葡に「Oibo. 名誉。例、Core vaga iyeno qibo nari. これわが家の名誉である。また、成果、または、利得。例、Soregaxi Core mada sanjita qibomo nari. 私はここまで来たが、それについての褒賞も得ず、また私の労苦の成果も得られない。これは人が自分の望んでいた物が得られない時に言うものである。」とある。この意味の用例は、太平記一〇、蓋囊抄などに見られる。文明本・書言字考「規模」。準和製漢語。

「きょうわ(共和)」

① 大老奉行の方々共和して天下の静謐の功をはかり、いかにも心力を尽さるべきを、益なき乱を引き起し、天下をして大乱に及ぼしむ。(下380)

右の「共和」は「共同和合して事を行うこと。」(新国)の意味

であつて、現行の政治形態としてのそれとは異なる。漢籍にも用例がある（史記・齊太公世家）が、日国・新国には古い用例がない。古例は日国の「政治論略（金子賢太朗訳）」よりも古い用例となる。中国漢語である。

〔きよよう（許容）〕

- ① 將軍我もしか思ふぞと許容し給ひ、夫より軍勢を四方に分てかこましむ。（上73）

右の「許容」は「ゆるす」というよりも「同意する」という程の意味である。日葡に「Qioyô. Ague mochiiru. 尊重すること、または、許し、同意すること。」とある。日国には、菅家文章三・九曆、平家三などの用例をあげる。文明・書言「許容」。大漢和には漢籍の用例がない。

〔くせん（苦戦）〕

- ① 賊兵も今は必死と思ひ定め、刃を振立矢を飛し、火烟の中より突て出、苦戦すれば、寄手も思の外に討れたり。

（上56）

- ② 徳川勢（中略）横合より駆入て、織田勢の馬の諸膝平首かけて切て落し、胸掛・太股・草摺当るを幸ひと突立切立、苦戦して討死す。（上186）

- ③ 敵は今朝鷺津・丸根の城責に疲労し、又晩景には瀬山際にて苦戦し、只今又雨降くれば夜討の用心して夜も安穩には眠るべからずして、心身共に疲るべし。（上220）

右の「苦戦」については、前掲別稿「正説大全」で述べた。文明本・書言字考に見出し語が無い。大漢和に李白詩、杜甫詩の用

例があるので中国漢語である。

〔けいえい（経営）〕

- ① 秀吉は此後大坂本願寺の地を経営し居城とせん為、十州の諸侯伯に課せ、海陸より大石巨材運漕し、（中235）

- ② 駿府は今川家代々居城なりしが、氏真没落の時焼立られ、跡かたなくなりしを、今五ヶ国の本府と定められ、去年の春より経営始ありて、此時漸成功ありしなり。（中330）

右の「経営」は「なわを張り、土台をすえて建物をつくること。縄張りして普請すること。」（日国）の意味であつて、現行の「会社や商店などをいとなむこと。」（例解）とは異なる。日葡には「Qeyei. Fe iromamu. 招宴の準備をし整えること。例、Qeyei suru. また、商売をすること、または、生活費その他の物を稼ぐこと。」とある。しかし、この意味とも異なる。むしろ、大漢和の「①家を建築するとき、土地をはかり土台を据ゑること。縄張りして普請する。〔書経〕〔詩経〕」などの漢籍の意味に近い。文明本に「経営（605）」とある。

〔けつこう（結構）〕

- ① 抑義昭かく二度まで信長失ふべしと結構ありしかども、何の恙もなく都をひらき給ひし事、内々細川藤孝信長方にしたがつて、能こしらへし故とぞ聞えける。（中42）

- ② 御父子の御中に何の御恨ありて、唯今かかる結構の候べき。（中122）

- ③ 当城は右大臣家累年御志を尽し給ひて結構されし物を、賢秀重恩を受し身にて、焼捨候はん事憚なきに候はず。

(中196)

この「結構」は別稿「正説大全」で述べた。

①②は準和製漢語、③は中国漢語である。

「こうざう」(構造)

① されば殿下一昨天正十三年の春より、内野に御所構造せられ、四方三千歩四囲の築地石垣山の如く、鉄柱銅扉の高樓飛閣金薨珠簾日影にかがやき、(中344)

② 神君も御悦有て「芳春院今まで安富を極められし人なれば、不自由ならん様江戸にて家作造営申付べし。当年寒風の折柄なれば、春に至り暖和を待て、江戸へ下らるべし」との事にて、江戸第宅構造あり。(下134)

右の「構造」は「建物を造る」という動詞としての用法である。現行の「もののくみたて。しくみ。」(例解)という名詞としての用法と異っている。大漢和、日国、新国みな、この動詞としての意味を載せる。用例には「古事談」などがあがっている。中国漢語も同義。

「さう」(左右)

① かくて諸国の大小名は各其掌る所を申渡され、直に夫々出陣するものもあり、一先帰国し一左右次第打立んと申て帰るもあり。(下176)

② 惣將最上へ一左右にも及ばず、陣払して退散す。(下226)

③ 頓而御左右奉^レ待候。(下359)

右の「左右」は「右と左」という意味ではなく、「知らせ」の意味である。日葡に「So. Sayu」左の方と右の方と。また、知らせ、

または、便り。」とある。日国、新国にも「知らせ。情報。音信。

消息。」とあつて、古く太平記、狂言などの例をあげている。一方、大漢和によると、漢籍の用例のある意味としては、「左と右」「そば。かたわら」「同僚」「近臣」などとあるが、「知らせ」の意味はない。文明本・書言字考に「左右」とある。なお、「吉左右」という語がある。

④ 上杉方より吉左右^{きさう}今日か明日かと評議して居たる所、(下312)

⑤ まして城中に残りし女房稚子^{ちご}が神に祈り仏をたのみ、吉左右^{きさう}をのみ待こがる。(下353)

これは「良い知らせ」という意味である。日葡に、「Oiso. Yogi.」良い知らせ「吉報。」とある。日国、新国にも「吉報」とあつて、上杉家文書「天正九・五・六、サントスの御作業などの例をあげる。文明本に「吉左右^{キッサウ}」(8263)、書言字考に「吉相^{キッサウ}」(627)とある。

「しばる」(芝居)

① 此合戦初度は織田方の勝、後度は今川方勝ければ、軍は牛角^{かく}と見えしかども、織田方は芝居^{しば}を去りし故、今川方の勝なりと、世上には評論しけるとかや。(上187)

右の「芝居」は「しば(仕場)」と同じで、「ある事柄の行われる場所。現場の意。主に戦場など屋外の場合をさしている。仕場居。」(日国)である。現行の「演劇。劇。ドラマ。」(例解)とは意味が異なる。新国には「敵味方が相対して戦う所」として、北条五代記をあげる。日国は看聞御記の例をあげる。文明本に「芝

居^{見物}所也 (9083)とあり、書言字考に「芝居^{シバ} (2304)」とある。
「じぶん (自分)」

① 本多平八郎 (中略) 大久保治右衛門自分鐘をふるつて真先にすめば味方の輩勇み進んで突戦す。(上345)

右の「自分」は、現行の「(代名) わたし」(例解)の意味ではなく、「自身」の意味である。日葡に「*tiom*. 私自身。例、*tiom o ximpe gozaru*. 私の方からこれをさし上げます。また、自分自身の能力、あるいは、技量。例、*tiomni canaumu*. 私の力や技量では不可能である。」とある。日国、新国にも「自身」という意味があり、温故知新書、運歩色葉集などをあげる。大漢和には「われ。おのれ。自身。自己。」とあるが用例をあげない。ただし、「自身」は「わが身。おのれ。」とあつて、唐書の例をあげる。文明本に「自分^{ジブン} (938)」とあり、「自」の左傍に「ヨリ・ミツカラ・ヲノツカラ」とある。なお、「自身」の用例も次のようにある。

② 城主栗谷越中守勝久自身案内し、廿九日熊川にかかりて江州山中朽木越にかからむとせられ、(上371)

「じゃっかん (若干)」

① 度々の合戦に将士討死せしは若干なり。(上54)

② 寄手命をおしまず攻戦へば、疵を蒙る者も若干なり。

(上68)

③ 若干の軍士の中に取込まれん事はこころ穢^{きたな}し (上78)

右の「若干」は、現行では「数量をはつきりはいえないが、それほど多くはない状態であること。いくらか。すこし。わずか。」

(例解)であるが、右の用例の場合は、次の

④ 信孝不臣の心をさしはさみ、広忠の所領若干押領したる子細を逐一告る。(上17)

⑤ 今川方は若干の大軍と聞ゆ。(上215)

⑥ 敵は若干の大軍也。(上221)

などを合わせて考えても明らかのように、むしろ「数が多い」という意味である。新国に「(数量を明示せずという語) 多く。あまた。」とあつて、源氏物語・御幸の例をあげる。

「しゅつちやう (出張)」

① 今度は殊更に大勢を催し、二手に分て、半は館^{なかに}を守らせ、半は其身引具して、再び秀武を攻んと出張する。(上63)

② 信秀大に悦び、重て出張^{しゅつちやう}の爲とて、渡理・筒針^{つづはり}に砦を構ひ、(上178)

③ 同年春の末今川方より佐脇・八幡の砦を守らしめたる板倉弾正・同主水等、二連木の戸田、牛窪の牧野の輩等を牒し合せ、小坂井・東岡に出張^{しゅつちやう}す。(上245)

右の「出張」については、現行の「仕事のために、自分の勤めさき以外のところにでかけること。」(例解)とは異なり、「出陣する」という意味で用いられていることは、別稿「正説大全」で述べた。文明本・書言字考に「出張^{しゅつちやう}」とある。和製漢語。

「しゅつとう (出頭)」

① 小西摂津守行長は(中略)石田三成とは同気相求るならひ、無二の親友互に姦詐邪佞を巧にし太閤世におはせし間は、随一の出頭^{しゅつとう}にて、財宝不足なく榮耀にほこりしが、(下366)

右の「出頭」は、現行では「一定の場所、特に、官庁などに出向くこと。」(新国)であるが、ここでは「要路にあつて政務に当たる者」(日国)の意味で用いられている。日葡にも「Xuto. Caxirano idasu. 主君の御前に出ること。比喻。主君の側近で、御前に出入りするのを許されること。Xutoxa. i. Xutonin. 主君の寵愛を受けて、その御前に出入りできる人。」とある。右の日国の意味の用例としては、甲陽軍艦、新可笑記、武家義理物語(浮世草子)などがある。一方、大漢和には「①頭角を出す。他よりまさる。魏志 ②其の場に出る。出席。冥報記 ③要路に居て政務に当る者。甲陽軍艦」とあつて、③の意味が本邦独自の意味である。文明本「出頭^{シュツトウ} (933 1)」、書言字考「出頭^{シュツトウ} (1228)」とある。『じんじゃう (尋常)』

① 徳川家の人々を見て、此上は力なし、尋常に戦て討死せよとて、弓鉄砲をそろへて寄来る敵を待。(上315)

右の「尋常」は、現行の「ごくふつうで、どこにもかわつたところがない。通常。ふつう。」(例解)とは異つて、「けなげて立派なこと。いさぎよいこと。殊勝。」(日国)の意味である。日葡に「Inp. 礼儀正しき、慎み深き、重厚さ、など。Injona. 礼儀正しい、重厚な、慎み深い(こと)」。Injona flo. 動作・振舞が慎み深く礼儀正しい人。Injoni. Injosa.』とある。用例には、太平記三、運歩色葉集などがある。文明本・書言字考に「尋常^{シンサン}」とある。準和製漢語。

「しんせつ (親切)」

① 神君は故太閤彼が母の申旨にひかれ、罪なき教如をして隠退させられしを、いとおしく思召けるのみならず、教如も殊更親切の志を顯はしけるを感じ給ひしにや、かく懇の仰有けるが、(下385)

右の「親切」は、現行の「相手に対して、やさしい心や態度で接すること。」(例解)とは少し異なり、「深くはなはだしいこと。特に、心入れの深いこと。心の底からであること。」(日国)などの意味である。用例としては、続日本紀などがあがつている。日葡に「Xinxet. Fucai aixet. 強い親愛の情と好意。Xinxemo fucusu. 強い親愛の情を示し、手厚いもてなしをする。」とある。中国漢語としては「びつたりとあてはまること。」(新字源・角川書店)、「よく適合してねんごろなこと。」(大漢和)とあり、朱子文集の例をあげる。文明本に「親切^{シンセツ} 或作 深雪 (961 4)」とある。準和製漢語である。

「しんたい (進退)」

① 其上近辺悉く広高が所務として、彼進退を任せ給ふ。(上282)

右の「進退」は、現行の「①進むこととしりぞくこと。②毎日のふだんの行動。③いまの職や地位にとどまるか、やめるかといった、自分の身のうえをきめる行動。」(例解)とは異なり、「心のままに、土地や人間を取り扱うこと。所領・所職について宛行・没収や補任・改易の権利を持ち、その権限を自由に行使すること。また対象である所領・所職。進止。」(日国)である。用例には、高野山文書―正安三年正月一八日、源平盛衰記四六など

がある。一方、中国漢語としては「人をひきあげて用ひることとおとすこと。用舎。」(大漢和)とあつて、周礼、戦国策の例をあげる。文明本に「進退」(375)とある。準和製漢語である。

「ずいぶん(随分)」

① 正則身不肖といへ共、内府の御味方して随分の微功を顕はし候事、全く正則一身の功にあらず、是しかしながら郎等ども命を捨身をかへりみざるが故なり。(下375)

右の「随分」は、現行の「相当に。非常に。」(新国)と異なり、「身分に従うこと。分相應。」(同)という意味である。ところが、日葡には「Zuibun. 副詞。よく、念を入れて、すぐれて。Zuibunni totonoye maraxó zu. 私が十分に用意しましょう、または、十分よく取り計らいましょう。Zuibuna, I, Zuibuno firo. すぐれていて、人々の間できわだった人。」とあつて、むしろ現行の意味に近い。一方、漢籍では「分に従ふ。分相應。」(大漢和)という意味で、易、白居易詩などに見られる。従つて、右の用例①の用法は漢籍と同じ用法である。文明本・書言字考に「随分」とある。中国漢語である。

「せいこう(成功)」

- ① 城郭成功せしかば、引間といふ名におもはしからず迎浜松と名付給ふ。(上298)
- ② 今度御上落はてて御帰国の後、修築を急がれ成功せしかば、十二月四日俄に御移りあり。(中330)
- ③ 急に御館を新営せられ、匠工構造を先頃より急ぎし所不日に成功せしかば、同月廿六日この新館へ御移徙ありける。

(下114)

右の「成功」は、現行の「①目的が達成されること。しようと思つたことをみごとにやりとげること。②世のなかでりっぱな地位や財産をえること。」(例解)などとやや異つて、「竣工」と同じような意味で用いられ、建築工事がおわつて、建造物ができあがることである。意味がかなり限定されている。日葡に「Xeicó. すなわち、Cono teum. 主君のために大いに奉公をし働いたこと。Xeicóno jin. 非常によく働き、奉公をした人。」とあつて、また意味が異なる。漢籍には、「事業をなしとげる。効果をあげあらはす。又、出来止り。」(大漢和)とあつて、用例①より広い意味である。書経、論語、中庸、莊子、荀子などに用例がみられる。文明本・書言字考に「成功」とある。中国漢語である。

「たいくつ(退屈)」

① 清衡が一男家清、二男基衡、三男清綱、其外重宗等これにそひて堅く守り、日数を送りければ、城兵弥退屈して、徒然慰め方なかりけり。(上74)

右の「退屈」は、現行の「ひまでこまる。」(角川新字源)とは異なり、「物事にあきる。氣力がなくなる。」という程の意味である。日葡には「Taicut Xirizoji cagamu. ある物に飽きること。あるいは、嫌氣を感じる。」Taicut suru. 飽きる。」とある。用例としては、毎月抄、太平記三などがある。なお、別稿「正説大全」参照。

「だいじ(大事)」

① 某よしや他国に候とも、祖父大事と聞時は急ぎ馳来るべき

身が、幸に御側に有ながら、祖父の討死するをよそに見て、城を落行事候べきや。(中375)

右の「大事」は、現行の「①」なによりも意味があつて、重要な。

② かけがえのないものとして、気をくばってたいせつにあつたつてゐる。」(例解) などと異つて、「一大事」という程の意味である。日葡にも「Dañi. Vôqina coto. 大變な事、または、重要な事。また、危険な事。Dañimo nai. 大したことではない。」とある。新国に「あぶないこと。危険。」として、源氏・葵の例をあげ、日国に「危険なこと。生死にかかわる一大事。」として、名語記二などの例をあげる。又、漢籍では、「大きい事業。大きな事件。小事の対。」(大漢和)として、易経、周礼、論語、老子などの例をあげる。文明本・書言字考に「大事ダイジ」とある。

「たうじ(當時)」

- ① 扱ただ今汝を呼出す事は、當時公家御政務休明にして、四海波静に、八島の外も皇徳に俗せざるはなし。(上89)
- ② 徳川殿當時小国を領し候得共、武略においては、恐らくは日本六十余州の諸大名肩を並ぶる人有べからず。(上308)
- ③ さればとて當時今川殿の弓矢を以て、徳川に敵せられん事覚束なし。(上322)

右の「當時」は、現行の「過去のある時。そのころ。あのころ。」(例解)と異なり、「現在。ただいま。」(新国)という意味である。日葡にも「Toji. Imano toji. 今、すなわち、現在この時。」とある。この意味の用例は宇津保、源氏・東屋、平家など、古くから見られる。漢籍の意味も「此の時。現在。目下。」(大漢和)であつて、

一致する。管子に用例が見られる。文明本・書言字考に「當時タウジ」とある。一方、過去の意味には「其節」が用いられている。

- ④ 其節の内府と當時の内府を同様に心得候はば、大なる過失たるべく候。(下318)

のように、「其節」と「當時」とが一文中に併用されている。

なお、別稿「正説大全」参照。

「ちかごろ(近頃)」

- ① 福島勢毎度突立られ、既に敗走せんと見えければ、正則馬を乗廻し「比興ひきようなる奴原をば一々首を刎よ、面々此所にて死ね返せ返せ」と下知すれば、家老共馬よりおり立持鎧を横たへ、「各近頃見苦しく候」と声を懸、真先にすすみもり返す。(下331)

右の「近頃」は、現行の「すこし以前から現在までのあいだ。このごろ。」(例解)とは異なり、「たいそう。はなはだ。」という意味である。日葡に「Chicagoro. 副詞。非常に。良いにつけ悪いにつけてそれを強調して言う言葉。例、Chicagoro migotogia. まことに一見する値打のある物である、または、大いに称賛すべきものである。」とある。新国に古語として「たいそう。すこぶる。」の意味をあげ、謡曲・鞍馬天狗の例をあげる。又、日国には申楽談義、虎明本狂言・薬水、毛詩抄、御伽草子・猫の草紙などの例をあげる。

「ちしき(智識)」

- ① これを聞諸大將いづれも誠に殿下兼々徳川は軍慮の智識なりと、仰らるる事御尤なりと感ぜぬものなし。(中373)

② 内府は軍旅の智識なりと、秀吉公常々称美し給ひけるほど有て、吾等式も感ずるに余りあり。(下154)

右の「智識」は、大漢和によると、中国漢語としては「考え知るはたらき。ちゑ。智慧と見識。智力。」という意味であつて、韓非子、韓愈書、宋史などに例があり、仏教語としては「佛道を悟つた名僧。善知識。」の意味であつて、法華文句に用例がある。これらに対して、日国に「知恵と見識。ある事柄に対する、明確な意識と、それに対する判断。また、それを備えた人。」とあるのは、和製漢語としての用法であろう。用例は、続日本紀、撰集抄、温故知新書などに見られる。右の用例も、この意味のものであつて、家康は「いくさの名人」であるということである。日葡には、当時の意味として、「Chixiqui. 徳の道の師。」と説明している。文明本・書言字考に「知識」とある。準和製漢語。

〔ちそう(馳走)〕

① 今度両三人以馳走井伊谷筋を遠州口へ可打出之旨、本望也。(上330)

② 其夜は伏見城に着せ給ひしかば、鳥井彦右衛門元忠御馳走として、御供の人々へ牡丹餅煎茶を出す。(下155)

③ 被入御念候て路次中泊泊以下に至まで無残所馳走共に候由、彼是以御芳志難報候。(下359)

右の「馳走」は、用例①が「走りまわること」、用例②が、「美味な食物」、用例③が「世話をする事。」などである。現行は用例②の意味に限定されている。日葡には「Chiso, Vaxiru. 世話をし、手厚くもてなすこと。」とある。用例①が中国漢語の意

味、用例②③が和製漢語の意味である。用例②の例は中右記に見られ、③の意味は虎寛本狂言・痺に見られる。文明本・書言字考に「馳走」とある。なお、別稿「正説大全」参照。

〔ちゅうごく(中国)〕

① 織田上総介信長は今度足利義昭を守護し、江州より切て登り、三好・松永等の逆徒を誅伐し、足利家再興の功を成就し、中国へ旗をたて、將軍家をわきはさみ、四海を令せん、齊桓晋文の霸業瞬息の間に定むべしと悦びいさみ、

(上303)

② 信玄元来中国に旗を掲て、齊桓晋文の霸業を志ければ是を幸ひとし、徳川家は織田殿第一倚頼せらるる所の与国なり、徳川家をさへ傾覆せば、織田殿を討ん事何の難き事あらむと思ひ立しなり。(上395)

右の「中国」は「日本の中心としての京都」という意味であつて、現行の「中国(シナ)」をさすのと異っている。日国に「国の中央の部分。天子の都のある地方。畿内。くになか。」とあり、続日本紀に例がある。中国漢語としても「なかつくに。国のまんなか。国の中央。都の地方。国中。」(大漢和)の意味があり、詩経・大雅、孟子、荀子に例がある。すると、右の用例①②は漢文的表現に基づくか。書言字考節用集には「中国(中華。中夏。並全。俗云、本唐。歴世殊國号。今代稱大清。)(①342)」とある。なお、「京都に旗を立つ」という表現も次のように見られる。

③ 義元かくと聞、さらば其信長を討亡し、京都に旗押立、天

下を統一せんとし、兼て鳴海・笠寺等の城々へば軍平を籠置ぬ。^(めおき) (上210)

〔チンジ (珍事)〕

① 大蔵此よしを聞て大に恨み、あはれその藏人が身の上いかなる珍事かあれかし。(上176)

② 本多・小笠原・内藤・酒井・永井等が兵士まで追々に馳集り、既に珍事に及ばんとするを見て、(中385)

③ もし珍事起らん時には、徳川殿の方人^{かたうど}して、日頃の御恩に報はんと、家の子郎等共を本陣に集めて、今や事起ると待居たり。(下44)

右の「珍事」は、現行の「珍しい事」というのとは異なり「思いがけない出来事。一大事。」という意味である。日葡には「Chinji. Mezuraxij co to. 新奇な事。」とある。日国には「思いがけない重大なできごと。変事。一大事。」とある。用例として、保元物語、椿説弓張月などがある。文明本に「珍事^{チンシ} 不思議^{不思議}事也 (1838)」とある。別稿「正説大全」参照。中国漢語。

〔はつかう (発行)〕

① 那須太郎資晴は、関白関東発行のよし聞て、其旗下の士太田原備前 (中略) 等、早速小田原に御出陣有て、殿下へ御拝謁あるべしと諫しに、資晴兎角延引したれば、(中474)

右の「発行」は、現行の「本や新聞の発行」というのとは異なり、「出発」の意味である。新国や日国に、この意味がなく、大漢和に「出発。出かけること。」として、漢書・匈奴傳の用例をあげるので、右の用例①の用法は漢文的表現に基づくものかと思

われる。文明本・書言字考なし。

〔はつかう (発行)〕

① 秀康卿何事かと急ぎ小山へ参り給へば、伏見よりの注進上方凶徒蜂起の事、委細御物語有て、会津御発向は御延引なされ、直に上方へ御馬を出させ給はんか、(下206)

右の「発向」は「討伐のために軍を進発させること。」(日国)であつて、将門記に例がある。日葡に「Faco. Vocori, mucor. 焼き払つて、打ち滅ぼすこと。また、ある国、または、軍勢を打ち滅ぼすために行き向かうこと。(注) 当時、上掲の第二義の「打ち滅ぼすために行き向かう」意に用いるのが一般的であつたが、その一方に前代から見られる第一義の用法 (焼き払つて、打ち滅ぼすこと) も存したことを反映するものであらう。」とあつて、同じ説明がある。大漢和にも「出向かふ。出発。〔舊唐書、高宗紀〕」とある。

〔ばんげい (晩景)〕

① 其日の晩景秀吉より光秀が洞が峠の本陣へ、堀尾茂助吉晴使として申遣はしけるは、(中205)

右の「晩景」は「夕方景色」という意味ではなく「夕方」ということである。日葡によると、「夕方景色」の場合は「バンケイ」と読み、「夕方」の場合には「バンゲイ」と濁る。即ち、日葡に「Bangei. Curo de i. 夕方景色。」→ Banguet. Banguet. Cure に同じ。四時にまだ少し間のある時刻。」とある。「夕方」の意味の用例は字類抄、太平記などに見られる。一方、中国漢語としては「夕暮の景色。ゆふげしき。」とあつて、その用例は杜甫詩、

張均詩、張何賦などである。「夕方」という意味はない。従つて、この意味は準和製漢語となる。文明・書言に「晩景」^{イグケイ}とある。

〔はんぷく（反復）〕

- ① 後年繁延・千晴・蓮茂が逆謀をかまへし時、満仲も始の程は同意して、与党^{よとう}に加はりしが、其密会^{なかつ}の半より、満仲は反復し、密事を師尹に告て、先年相撲の怨を報じたり
(上37)

右の「反復」は、現行の「同じ動作をなんどもくりかえすこと」。(例解)とは異なり、「裏切る」ことである。日国に「心変わりして信義を破ること。うらぎること。」として、人情本・春色辰巳園の例をあげる。大漢和にも「〔反覆〕意志や言行の定まらないこと。そむく。うらぎる。反復。」とあつて、詩経、荀子、史記、漢書、魏志の例をあげる。右の用例①の用法は漢文的表現に一致している。文明本に「反覆^{ハンプク} (663)」とある。準中国漢語。

〔ひやうろん（評論）〕

ソムダスツカヘス

- ① かくてもこのまま帰坂せば、天下の評論もいかなり。加賀野井・竹鼻の両城を賣落さんと、長岡与一郎忠興^{さきて}先手として、十重廿重に加賀野井城を賣かこむ。(中278)

右の「評論」は、現行の「評論家」とか「文芸評論」などというのとは異なり、もつと広く一般的に「批判」という程の意味である。日葡に「Fironlifeoron. Pacari ronzuu. 論争。」とあり、日国に「物事の価値・善悪・優劣などについて批評し論ずること。その文章。」とある。その用例には、文明本、節用集、運歩色葉集、地藏菩薩靈驗記などがある。大漢和にも「是非得失を品評し

論ずる。」とあつて、後漢書、魏志、隋書に用例が見られる。従つて、右の用例①は中国漢語に一致する用法である。

〔ふくわい（不快）〕

- ① ここに水野藤十郎忠重は兄下野守信元と不快になり、鷲塚に閑居せしが、(上260)
② 高野山の衆徒は根来寺と不快なれば、根来の徒とは一味せず、(中299)

- ③ 忠興はもとより三成とは不快なれば、その事いなむよし聞て、(下95)

右の「不快」は、現行の「いやな気持ちになること。不愉快。」(例解)とは、やや異なり、「仲の悪いこと。不和。」という意味である。日葡に「Fuquai. Cooroyocarazu. 友情と交際上の破綻。Fuquaide gozaru. 1. fuquaxeraru. 交誼、交際の上で以前のように順調でない。」とある。この意味の用例は、字類抄、平治物語、古今著聞集などに見られる。漢籍の意味は、「心よからぬこと。不愉快なこと。面白からぬこと。不愜。」(大漢和)とあつて、むしろ現行に一致する。用例は易経、戦国策、史記、漢書、後漢書などに見られる。文明本に「不快^{フクワイ} (心中ノ悪兒) (628)」、書言字考に「不快^{フクワイ} (世ニ謂テ疾日ニ一ト) (1187)」とある。準和製漢語。

〔ほつそく（発足）〕

- ① 其後上方の逆徒等弥蜂^{やちよう}起すと聞えしかば、帶刀いそぎ越前へ馳歸り、府中の城を守るべしと七月十八日浜松の城を發足す。(下199)

- ② 七月晦日暇賜はり小山を發足せり、(下213)

右の「発足」は、日葡に「Fossocu. または、fassocu とも言い、むしろの方がまさる。Aximo vocosu. すなわち、izumu. 戦争などに出かけること。」とあるように、「戦争などに出かける」という意味で、限定されて用いられている。一方、漢籍では「はつそく・ほつそく。出発。旅立ち。」(大漢和)のように、必ずしも戦争に限らない。もつと広く「出発。旅立ち。」の意味である。用例は詩経、楚辞、蜀志、人物志などに見られる。文明本に「發足(655)」とある。準和製漢語。

〔ほんそう (奔走)〕

① 十二月の末於義丸殿元服の式行はれければ、羽柴三河守秀康となのらせ、河内国にて賄料一万石参らせ、深く奔走せられける。(中294)

右の「奔走」は単に「走り回る」という意味ではなく、「厚く世話をすること」である。日葡に「Fonso. 歓待。例、Tôzaimi fonsô sunu. 親切に心を配り、てきぱきと動き回って、非常に手厚くもてなす。招宴の座中では、時としては、褒めて次のように言うことがある。Coto nai gofonso degozaru. われわれに対して御主人は大変なもてなしをなさる、などの意。」とある。この意味の用例は、毛詩抄、評判記・色道大鏡、仮名手本忠臣蔵などに見られる。漢籍にも「走り回る」「世話をする」という意味がある。中国漢語。

〔まつくろ (真黒)〕

① 「いざ味方を救はん」と、三百余人従へて揉にもんで、江上の北より真黒になりて馳かかり、鉄炮を打かけ横筋違に

突てかかれば、(下436)

右の「真黒」は、黒いという色よりも、「激しく」という程の意味である。日葡に「Maccuroni. 副詞。黒く、ほんとうに黒く。または、激しく、嚴重に。例、Maccuroni vitayuru. 強く嚴重に訴える。Maccuroni yorô. 武具を一式手ぬかりなく着用する。」とある。日国には「わき目もふらずに夢中になるさま。いちずなさま。」として、太平記、サントスの御作業の例をあげる。文明本に「真黒(5715)」、書言字考に「純黒(7301)」とある。

〔みれん (未練)〕

① 敵未練の謀をなし、欺て手出しを卒忽にしかけなば、味方元より望所の幸、一手並見せて打破るべし(下312)

右の「未練」は、現行の「心残り。あきらめきれない。」という意味ではなく、「未熟」という程の意味である。日葡に「Miren. Imada nerezû. 臆病。Mireno camayuru. 臆病である。この語の本来の意味は、軽々しさ・軽薄さということであつて、すぐに飛びかかったり、腹を立てたりするけれども、肝心の時になると、へまをしたり、気力をなくしたり、逃げ出したりするような人について言う語。」とある。日国に「まだ事に熟練していないこと。さま。未熟。」とあつて、中右記、毎月抄、源平盛衰記などの例があがつている。角川新字源には「⑦なれていない。熟練していない。④あきらめきれない。心残り。」は、**国**という表示があつて、日本語としてのみ用いるものである。準和製漢語。

〔むよう (無用)〕

① 牡丹餅嫌ひの人は参る事御無用」といひながら通りしとぞ。

(下156)

右の「無用」は「①用事がないこと。②必要でないこと。」とは異なり、「してはならないと禁止する語。」(新国)で、虎寛本狂言や甲陽軍艦に用例がある。日葡には「Muyo, Mochijin coto naxi. 必要でもなく、効用もないこと。」とある。漢籍には禁止の意味はなく、「役に立たない。用途がない。」という意味で、荀子、史記、後漢書などに用例がある。準和製漢語。

〔めいわく(迷惑)〕

- ① 国中争戦のみぎりなれば、たやすく城を出べからざるむね、家人ども諫言申により、其諫め背難く猶予仕る所、かかる仰を蒙り、迷惑するものなりとの事也。(上95)

- ② ここに於て岡崎普代の衆甚以て迷惑しながら、数年をふる程に、(上197)

- ③ 寺僧は大に迷惑しけれども、信長父子怒らるるとも、僧法師の事なればさりとて辛き沙汰には及ばるまじと、油断して時刻延引す。(中169)

右の「迷惑」は、現行の「あることのために、こまったり、いやに感じたりすること。」(例解)とやや異なり、「どうしてよいかわからないで途方にくれること。とまどうこと。」(日国)である。この意味では漢籍にも、「心がまよいまどふ。六韜、管子、荀子、戦国策、淮南子、史記、莊子」のように見られ、漢文的表現に通じる用法である。日葡には「Meinacu. 苦悩、あるいは、心を痛めること。例、Meinacu xenban nari. この上ない悩みと苦しみを感ずる。」とある。「どうしてよいか迷う」意味の用例は、字類

抄、平家物語などに見られる。文明本に「迷惑(メイワク) (8791)」とある。

〔ものがたり(物語)〕

- ① 仍て此卿も厚く悦ばれ、或時物語のちなみに、泰親君の世系を問はれければ、(上116)

- ② 大久保甚十郎は深手を負帰陣し、諸士の専功を見届て、味方の輩に物語して落命せしかば将卒とも甚だ是をおしみける。(上347)

- ③ 勝家は府中の城に立寄、前田又左衛門利家に湯漬をこひ、塩引の鮭を所望し、再進まで喰てゆるゆる物語し、夫より北の庄へと立帰る。(中234)

右の「物語」は、現行の「散文の文学作品」などという意味ではなく、単に談話という意味である。日葡に「Monogari. 談話。Monogari no sasu. 談話をする。また、ある出来事についての物語。または、報告。」とある。この意味の用例は、古く万葉集、宇津保、源氏・桐壺、平家物語などに見られる。書言字考に「語、説話、談話、物語(⑩443)」とある。

〔やさし〕

- ① 今度石田治部やさしくも内府を敵とし大事を思ひたち、昏暗無謀の大小名是にかたはられ、関東へ下るよし聞ゆ。(下415)

右の「やさし」は、現行の「人に対するあつかいがおだやかで、思いやりがある。」(例解)とは異なり、「けなげである。殊勝である。」(新国)という意味である。日国には「多く、優位にある者から用いる。」と説明してある。一方、日葡には「Yasaxi. 礼

儀正しく、育ちがよくて、温和な(人)。また、家、庭(NEA)、茶の湯(Chanoyu)などを調えるについて物ごのみをする(人)「好事家」とあつて、本例とは意味が異なる。本例と同じ意味は今昔物語集、平家物語、愚管抄、保元物語などに見られ、主として鎌倉時代以来の軍記物語に通ずる用法と考えられる。文明本に「花容ヤサシ或作花盛」(563)、書言字考に「艶嬌ヤサシ優美同有情同詭同本朝俗字(①34)」とある。

「よくりゆう(抑留)」

- ① 宋の武帝南燕の慕容超を討れし時、今日往亡にあたりしとて抑留する者ありしに、我往て彼亡ぶべしとて、軍をすすめ大に勝利を得られたり。(下326)

右の「抑留」は、現行の「むりにひきとめておくこと」とくに、外国の船や人などを、自分の国に強制的にひきとめておくこと。「(例解)」とは異なり、広く「ひきとめる」という意味である。日葡に「Yocuriu. Voyaje lodomuru. たとえば、客人とか、何か他人の物とかを無理に引き止めること。」とある。日国には「おさえとどめること。一所にとどめおくこと。」として、三代格、権記・長保二年九月二八日、源平盛衰記などの例をあげる。新国には「ひとところにとどまること。」として、字類抄をあげる。大漢和には「強いてひきとどめる。」として、宋史をあげる。中国漢語である。

「りよくわい(慮外)」

- ① 不可慮外(上86)

右の「慮外」は「思いがけないこと。意外。」(新国)などとなり、「ぶしつけ。無礼。」(同)という意味である。日葡には「Rioguai. Vomoio foca. はからずも、または、思っていたのと違つて。」とあつて、むしろ前者の意味である。後者の意味の例は、今昔物語、義経記、言継卿記などに見られる。新字源には「もつてのほか。無礼。」の意味は、日本語のみでのものとする。

「ゑしやく(会釈)」

- ① 兄弟一同に適中に突て入、死物狂に奮戦すれば、池田・中川等が大勢も会釈し兼て見えにけり。(中209)

右の「会釈」は、現行の「かるく一礼すること。」(例解)と異なり、「相手となる。あしらう。」(大漢和)の意味である。日葡は「Yexacu 挨拶、愛想、丁寧な応待。Yexacuno yoi filo. 愛想のよい、人あしらいのよい人。」とあつて、専ら「挨拶」の意味にとつてゐる。新字源には、仏教語として「仏の教理を理解し解釈する。」とし、日本語のみの意味として「①人の気持ちを考える。②うなずく。③軽くおじぎする。」とある。準和製漢語。

「ゑんりよ(遠慮)」

- ① 神君も始て委細を聞召、守殿の武勇、又一が遠慮の程御感大方ならざりなり。(下352)

② 是只御子の御恥辱とのみは、申さるべからず御父上にも御過失になるべく候。是程の御遠慮ましまさぬこそ、うたてけれ(下372)

右の「遠慮」は、現行の「他人に対して、自分のしたいことや、言いたいことをひかえめにすること。」(例解)と異なり、「遠い

先々までの考え。」(新国)の意味である。日葡にも「Yenrio. Tonogi vomonbacari. 将来のことを考えめぐらすこと、または、将来に備えて用意すること。Yenrio megrasu. 今にも起つて来ようとしていることに心を配る、または、将来に備えて用意する。」とある。この意味の用例は、古く吾妻鏡、保元物語、太平記、天草本伊曾保などに見られる。この意味は、漢籍のそれにも通ずるものであつて、例は左氏、史記、後漢書、魏志などにある。文明本には「遠慮エンリョ 或作延慮 論語曰人而無遠慮必有近憂」(705)とある。中国漢語である。

おわりに

以上、『改正三河後風土記』の用字・用語について、一、表記と意味が現行と異なるもの、二、意味が現行と異なるものについて検討した。一は「乱暴」の一例のみであるが、二は用例多く、全部で五十三例である。このうち、和語は「芝居」「近頃」「真黒」「物語」「やさし」の五語に過ぎない。他の四十九例は全て漢語である。このことから、和語よりも漢語の方が意味の変化が激しいことがわかる。

更に、漢語の中でも、漢籍に出典の見られる「中国漢語」の例として、「幼稚」「演説」「格言」「勘弁」「共和」「苦戦」「構造」「随分」「成功」「大事」「当時」「中国」「珍事」「発行」「反復」「評論」「奔走」「迷惑」「抑留」「遠慮」などがあり、一方、漢籍

に出典の見られない「和製漢語」の例として、「介抱」「出張」などがある。又、意味が日本独自のものである「準和製漢語」の例として、「覚悟」「規模」「結構」「左右」「若干」「出頭」「尋常」「親切」「進退」「智識」「馳走」「晩景」「不快」「発向」「発足」「未練」「無用」「慮外」「会釈」などがある。

更に、意味が現行と異なる理由を考えると、改正本の意味が室町時代の意味(日葡辞書)と一致しているものとして、「右往左往」「幼稚」「覚悟」「我慢」「勘弁」「規模」「許容」「左右」「自分」「出頭」「尋常」「退屈」「大事」「当時」「近頃」「馳走」「発向」「晩景」「不快」「発足」「奔走」「真黒」「未練」「迷惑」「物語」「抑留」「会釈」「遠慮」などがある。一方、日葡辞書と、意味が必ずしも一致しないものとして、「経営」「随分」「成功」「珍事」「やさし」「慮外」などがある。これらのうち、前四語は漢籍に近い意味で用いられており、後二語は鎌倉時代以来の軍記物語に通じる用法である。『改正本』の用字・用語の特色は、主として、右の二点に存すると考えられる。

(注) 本稿は、大漢和辞典に用例の見られないものを、一応「和製漢語」として断つておく。

『改正三河後風記』について (一)

On Kaisei-Mikawa-Gofudoki (1)
—Focusing on the Letters and Words—

Utsunomiya Mutsuo

As to the words used in *The Kaisei-Mikawa-Gofudoki*, those whose meanings are different from those now in use are found more often in Chinese characters than in Japanese original words. And as to reasons which have caused the meanings to change, they are more frequently found in the meanings of the same words as Chinese classics and in the meanings of the same words as those used in war chronicles, in addition to historical change.